

藤原宮第20次（大極殿北方）の調査

(昭和52年2月～昭和52年7月・昭和52年12月)

この調査は、大極殿院中央部北半、すなわち、大極殿跡の土壇に北接する部分から大極殿院北回廊までを対象として実施した。このうち、北回廊の一部は、かつて日本古文化研究所の調査により検出されたところである。今回の調査の主眼は、北回廊の位置、規模、構造を知り、古文化研究所の示した大極殿院復原案の正否を再検討すること、及び、後殿の存否を確認して大極殿院の構成を明らかにすることにあった。

調査の結果、大極殿院北回廊の遺構を始め、藤原京条坊地割の遺構、宮造営に関わる運河の遺構を検出し、宮および京の造営計画の一端を明らかにすることができた。検出した遺構は、藤原宮宮前の遺構（A期）、藤原宮期の遺構（B期）、その他に分けられる。

A期の遺構には朱雀大路計画線 S F 1920とその東西両側溝 S D 1921, 2065, 2066、四条条間小路計画線 S F 1731およびその南北両側溝 S D 1729, 1730, 2075 2076の他、南北溝 S D 1925、南北大溝 S D 1901-Aがある。

S F 1920は朱雀大路計画線の遺構で、今回は、四条条間小路計画線との交差部を検出した。路面の幅員は約14.7m、側溝心々で16.5mを測る。側溝は幅1.6～2m、深さ0.7～1mの素掘りの溝である。

S F 1731は四条条間小路計画線の遺構で、この遺構の西延長部は第16次調査で検出している。路面の幅員約5.4m、側溝心々約7mである。側溝の規模は朱雀大路計画線のものと変わらない。小路側溝と朱雀大路側溝との関係をみると、朱雀大路東側溝（S D 1921）は小路路面を横断して連続し、小路両側溝（S D 2075・2076）はそれぞれ大路東側溝に流れこむ。他方、大路西側では、大路側溝（S D 2065・2066）は小路路面を横断することなく、小路の南北で鉤の手に小路側溝（S D 1729・1730）と接続する。この、南北道路と東西道路の側溝間の関係は従来の道路交差部の調査で得た知見と同じである。

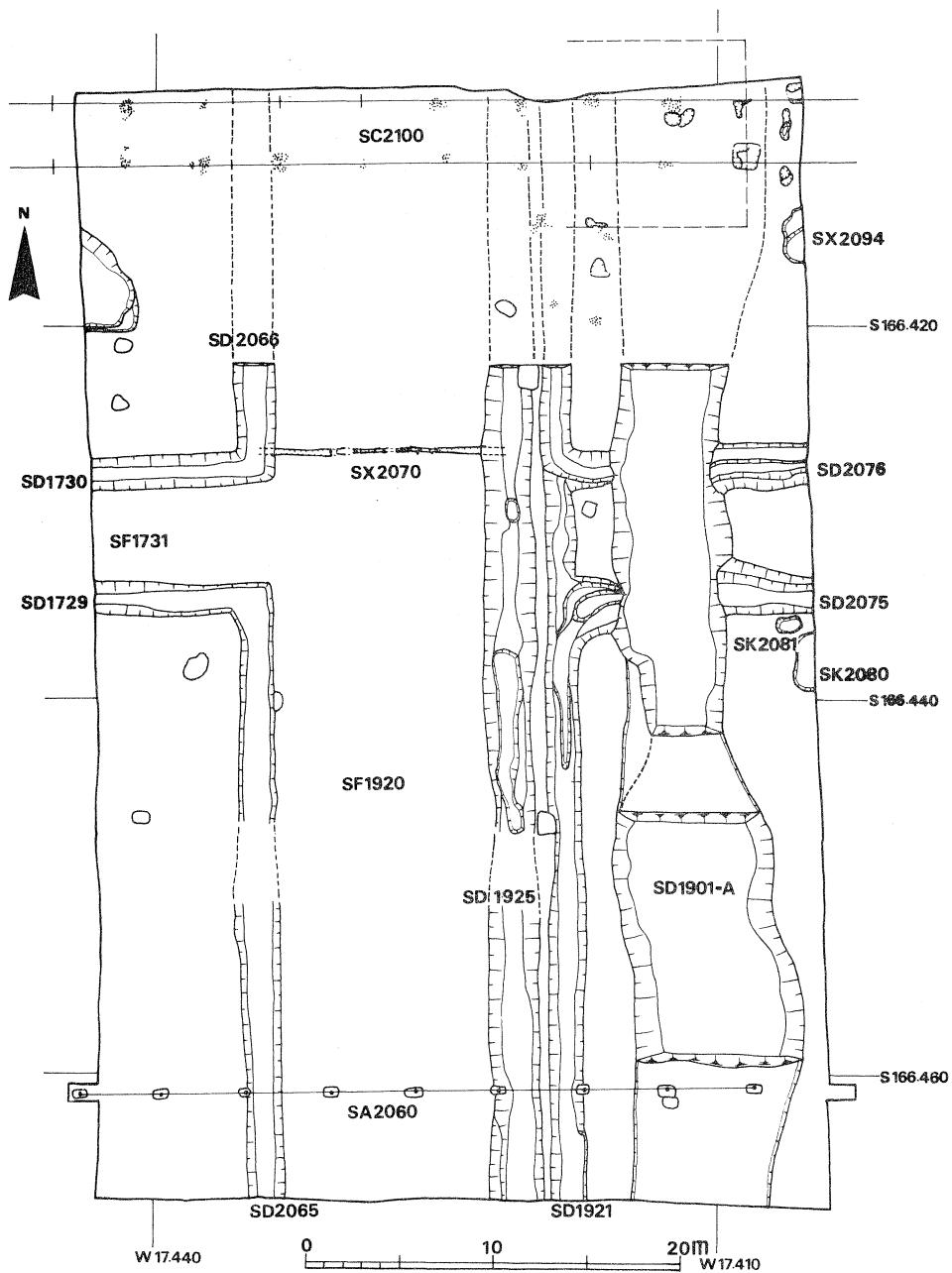


調査地全景（北から）

これらの道路側溝中からは、土器、獸骨、瓦片などを検出した。側溝出土土器の年代は、後述する大溝出土の土器と同様、7世紀末葉に置かれるものである。

S D 1925は朱雀大路東側溝 S D 1921のすぐ西に並行して走る素掘りの溝である。幅 2.5 m, 深さ 0.7 mを測る。この溝は、北門跡付近では朱雀大路東側溝と一部重複し、側溝より古いことが知られている。性格についてはなお明らかにし得ない。

S D 1901-Aも第18次調査で検出した遺構の南延長部にあたる。これは宮中心部を南北に縦貫する水路であり、後述の如く、その形状、埋没の状態、遺物の年代や出土状況などの諸点から推して、藤原宮・京の造営に関わる運河の遺構と考えられる。今回の調査では南北約45mにわたって検出し、うち約35m分について溝底まで掘り下げた。幅 6 ~ 7 m, 深さ約 2 mの規模を有する。護岸施設の痕跡はない。溝内の土層は 4 層に大別され、各々 0.5 m内外の厚さをもつ。このうち、下部の 2 層はかなりの水量が流されたことを示す砂礫の堆積であり、この中には 120 点の木簡を始め、大量の土器、木器、木片、獸骨が含まれていた。他に若干の金属器、瓦片も含む。



第20次調査遺構配置図 (1 / 400)

上部の2層はS D2100, S A2060などの藤原宮建造物の造営に先立って一気に埋立てた整地土と考えられる。特に最上層では褐色砂質土と暗灰色の粘土質が5cm程の厚さで版築状に互層をなし、堅く締っていた。この最上層の整地土は実際の溝幅よりかなり広い範囲（幅約15m）にまで及び、道路測溝上をも覆っている。これは、大溝を埋めた時点で条坊道路の側溝が既に埋っていたことを示すが、

一方、大溝と四条条間小路側溝が交差する部分の所見は、両者が併存した時期のあることを窺わせるものであった。すなわち、この部分の小路側溝内には大溝下層と同様の状態で木片、土器等の集中が見られ、また、ここでは、側溝の底が大きくえぐられて大溝に流下する状況を示していた。このことから、大溝と道路側溝が大溝より先に埋められたことは、ただ、宮の造営開始と相前後する時点における整地工事の事順を示すに過ぎないと考えられる。そして、おそらく、大溝は宮中心部の本格的な造営が始まる直前まで機能していたとみてよいであろう。大溝から大量に出土した遺物のうち建築部材風の木材を相当量含んでいることや、出土木片の多くが手斧の削り屑など造営工事に伴うものと考えられることもこれを裏づける。

また、大溝出土の木簡のうちには、壬午、甲申、癸未などの、天武11～13年に相当する紀年木簡を含んでいる他、天武14年制の冠位「進大肆」、大宝令には見られない官名「陶官」などの木簡があり、大溝の上限が天武朝末年頃にあることを示唆している。したがって、もし、大溝 S D 1901-A を藤原宮あるいは京の造営のための運河であるとする先の想定に誤りがないならば、藤原京・宮の造営の開始は天武末年にまで遡り得ることになる。少くともその可能性は



S D 1901 - A (北から)

高まったと言わねばならないだろう。このことは、今回の調査で得た特筆すべき重要な成果の一つである。

以下に大溝出土木簡のうち、主要なものを掲げる。なお、大溝出土木簡の一部は、既に「藤原宮出土木簡(二)」に収録しているので参照されたい。

〔S D1901-A出土木簡〕

- 1, □舍人官上毛野阿曾美□麻呂 右五
- 2, 陶官召人
- 3, □進大肆□□
- 4, ●法總師前 小僧吾白 啓者我尻坐□止
●僧□者 五百□
- 5, ●壬午年十□□□□毛野
●□
- 6, 癸未年十一月 三野大野評 阿 漏 里
□ □ □
- 7, ●甲申年七月三日
●日仕 甘於連
- 8, 旦波国竹野評鳥取里大贊□奈
- 9, □□□大伴部大吳□廿六以白
●□里春人□俵
- 11, 鴨評□
- 12, □月十三日
- 13, □□米三斗六升□

藤原宮期の遺構としては大極殿院北回廊 S C 2100、東西塀 S A 2060、暗渠状構 S X 2070などがある。

北回廊 S C 2100は南北1間、東西9間分を検出したが、このうち東3間分は古文化研究所の調査で検出されていたものである。回廊の基壇、礎石は残存せず、かろうじて、礎石下に敷いたと思われる根固めの栗石を検出するに留まった。

根固め石は径10cm内外の小礫を径1m前後の範囲に置いたものである。基壇全体の掘込み地業はもとより、住位置についても布掘り、壺掘りなどの地業を施した形跡は認められず、地山上、あるいは整地土上に直接根石を置いている。柱間は梁行が約3.3m(11尺)、桁行は東1間が約3.2m(11尺)、以西8間が約4.1m(14尺)である。この部分の柱間が地より広くなることに疑問をもった古文化研究所は、回廊主列から1間ずつ南北の位置に根石列を認定し、ここに梁行3間の門風の建物を復原し得ることを説いている。しかし、今回の調査では、古文化研究所の調査域以西の建物復原線上には全く根石がみられず、ここに建物を復原すべき積極的な根拠は得られなかった。柱間の広狭が、一般的には、柱の高低と表裏の関係をなくすと考えられることからすれば、この部分に何らかの建物を復原する見解にもいささかの根拠はあるが、根石の検出を見なかった現状では、梁行3間の建物を復原することは控えたい。仮に梁行1間の構造であっても、ここに大極殿・内裏間の通行の用を果す施設を復原することは十分に可能であろう。現段階では、古文化研究所が建物の根石を検出したとする部分はたまたま、前述の南北大溝を埋めた整地土の分布する範囲内であり、古文化研究所が、この整地土中に散在する礫群の一つを根石と考えた可能性のあることを指摘するに留めておく。この問題については、今回遺憾ながら調査を果せなかつた回廊北側部分(現在市道が通っている)の調査をまって結論を得たい。

S A 2060は大極殿北に位置する8間(約36m)、15尺(4.5m)等間の掘立住塀である。方向が東で北へわずかに振れている。掘り形は0.5×0.8m前後の大きさで、いずれも東西径が南北径より大きい。住痕跡からみると、柱は径15cm程の小規模なものである。S A 2060がこれ以上西へ延びないとすれば、これの中央の柱穴はS F 1920心と一致する。大極殿の背後を画する塀としては前期難波宮に例があり、そこでは、大極殿院の東西回廊に発した東西塀(S A 1602・1604)が、それぞれ中間に東西棟建物を介して大極殿・後殿間の軒廊によりつくが、藤原宮ではこうした遺構は検出されず、両者の性格の異同について、ただちに論じることはできない。

S X 2070は丸瓦と玉石で構築した暗渠状遺構である。丸瓦と玉縁の部分で重ねて連結し、その両側縁にこぶし大の玉石を並べている。一部では瓦列の上面にも玉石が認められ、本来、瓦列全体を玉石で覆っていたものであろう。なお、この遺構の末端はS D 2066、1925の埋土上にまで及んでいる。

この他、藤原宮期の遺構として大小の土壙があり、うち、S K 2080、2081、2094などからはかなりの量の瓦が出土している。

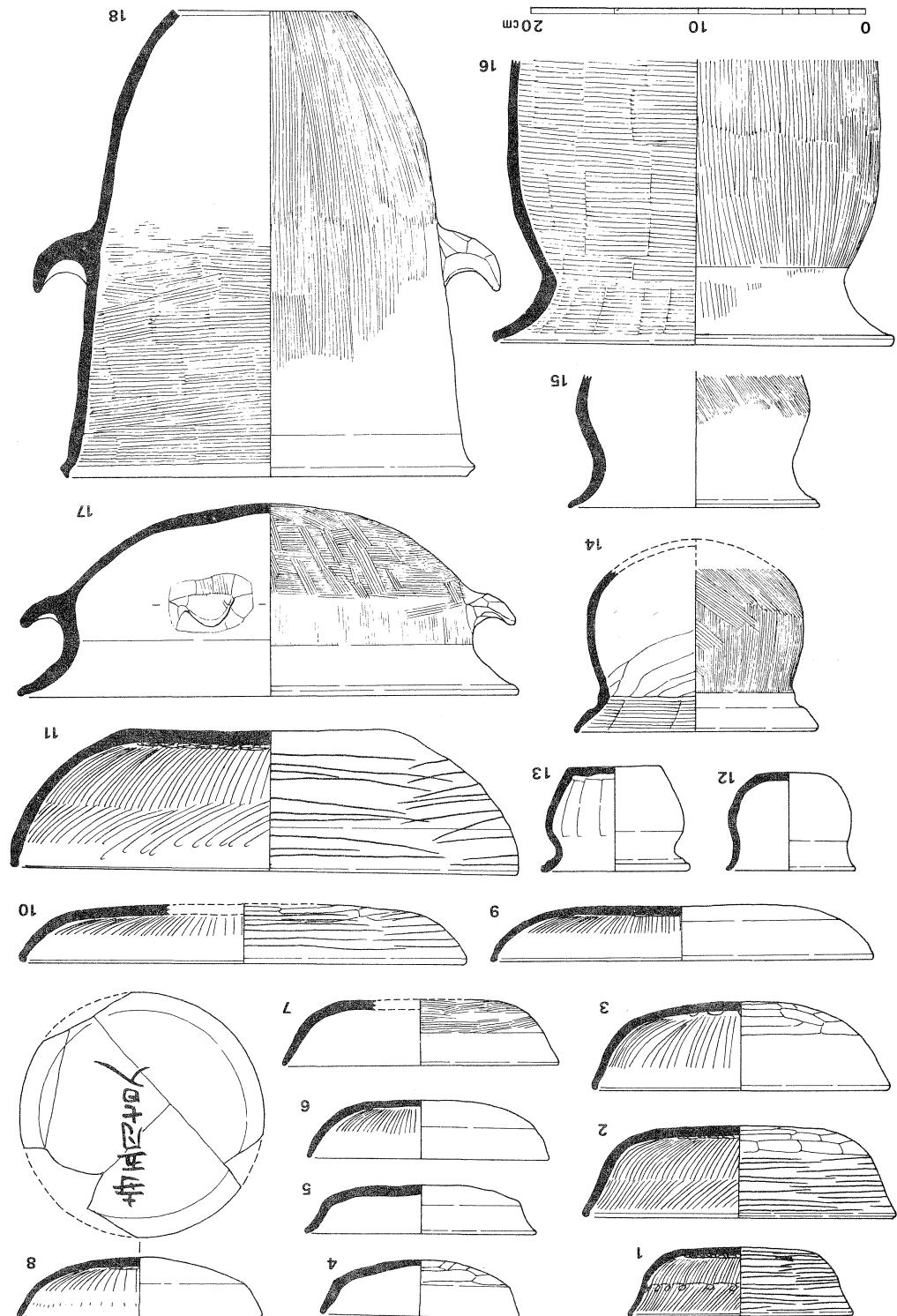
さて、以上のように、大極殿から北回廊までの間には、塀、暗渠以外に顕著な藤原宮の遺構がみられず、他の諸宮の例にあるような、後殿とみるべき建物が存在した直接の証拠も見出せなかった。しかし、大極殿背後に残された空間からみると、S A 2060・S C 2100間に後殿のような建物を配置することは十分可能であり、また、検出した遺構の上でも、丁度この間に位置する暗渠S X 2070が、そうした何らかの建物に付随したものである可能性も残されている。さらに、調査地が後世大きく削平をうけていることを勘案すれば、当初から後殿が存在しなかったとは断定できない。この点についても、今後更に検討を加えたい。

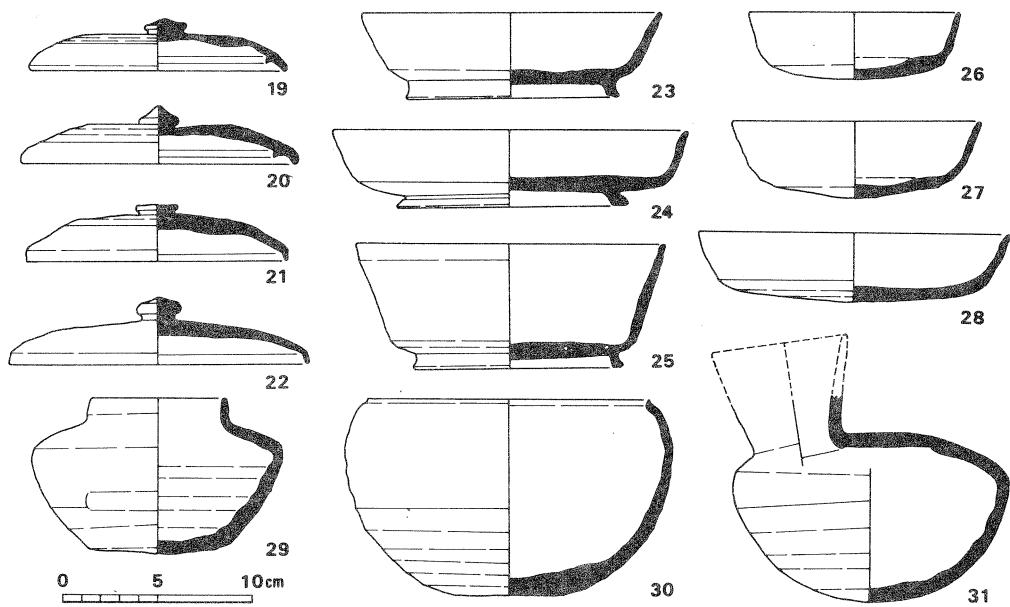
遺物には主要なものとして、宮造営時の運河S D 1901-A下層より出土した木簡と土器、瓦、木器、獸骨、条坊計画線S F 1920およびS F 1731の側溝より出土した土器、瓦、獸骨の他、造営時の整地層であるS D 1901-A上層、および土壙S K 2080、2081、2094から出土した瓦類がある。

S D 1901-A下層の一部には、木炭と多量の木片を含む黒色土層が認められ、この中から保存状態の良好な土師器、須恵器の一括資料を得た。ここでは、一応の整理を終えた黒色土層出土土器について、その概要を報告する。

土師器には、杯A(1～3)、杯B、杯C(6, 8)、杯G(5)、杯H(4)、杯X(7)、高杯、皿A(9, 10)、盤(11)、壺B(12, 13)、甕A(15)、甕C(16)、鍋B(17)、瓶(18)がある。杯A中の1点(3)は、口縁部外面にヘラミガキがなく、また、内面の暗文もラセン文と1段の放射文という組合せのもので、この時期のものとしては異例のものである。杯X(7)は、暗文をもたず底部外面をハケメ調整するものである。皿Aでは、口縁部外面にヘ

SD 1901 - A 厂署出土土器 (1/4)





SD 1901 - A 下層出土須恵器 (1 / 4)

ラミガキをもつものが少数例ある(10)。須恵器には、杯A(27, 28), 皿, 鉢, 楢, 橫瓶, 養がある。

墨書き土器として、土師器杯Cの底部外面に「寺五月七日入」の墨書きをもつものが1点(8), 同じ内容を記したとみられる小片が2点ある。他に、杯Hの底部外面に「寺」の墨書きをもつもの(4), 鍋の体部外面に「麻績家口」の墨書きをもつものが各1点づつある。須恵器では、鉢の外部に「殿」の墨書きをもつもの、皿の底部外面に落書き風の墨書きや墨痕をとどめるものがある。

以上が、SD 1901 - A 下層のうち黒色土層より出土した土器の概要であるが、器種構成を主として、いくつかの注目すべき内容がみられる。まず、土師器と須恵器の数量比をみると、約7:1で土師器が圧倒的に多い。土師器では、供膳形態と煮沸形態が相半ばし、供膳形態では杯類がその大半を占める。杯類の内容は、杯Cが39個体で最も多く、以下、杯Aが16個体、杯Gが8個体、杯Bが3個体あり、底部外面をヘラケズリし、口縁部との境に稜をもつ杯Hは1個体にとどまった。盤、皿類の数量は、杯類の約2割である。一方、煮沸形態では、養類が62個体あり、鍋Bの出土量が32個体の約2倍出土している。

須恵器では供膳形態が多く、その大半を占める杯類では、杯BⅢ(23)が9

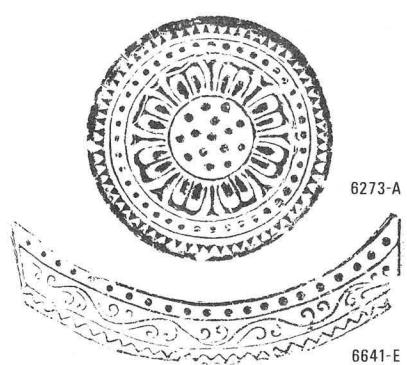
個体、杯BⅡ（24）が2個体、杯BⅠ（25）が1個体ある。杯A類は3個体、杯Gは1個体にとどまった。蓋は2点あるが、いずれも、その法量や形態から、杯Gもしくはやや古い時期の杯B類に組合うものとみられ、出土量の多い杯BⅢに組合う形態の蓋は皆無である点が注目される。

さて、以上述べてきたこの土器群の器種構成にみられるいくつかの特色は、宮造営のための運河という大溝S D1901-Aの性格と関連するものであろう。将来、他の土器群との詳細や比較検討が可能となれば、宮造営時というやや特殊な状況下で使用された土器群として重要な価値をもつものとなろう。また、S D1901-A下層出土の土器は、天武朝末年頃と推定される大溝の開削から、大極殿院の造営に伴う整地工事によって埋没するまでの短期間の中に投棄されたものであり、編年資料としても極めて大きな価値を有するものである。

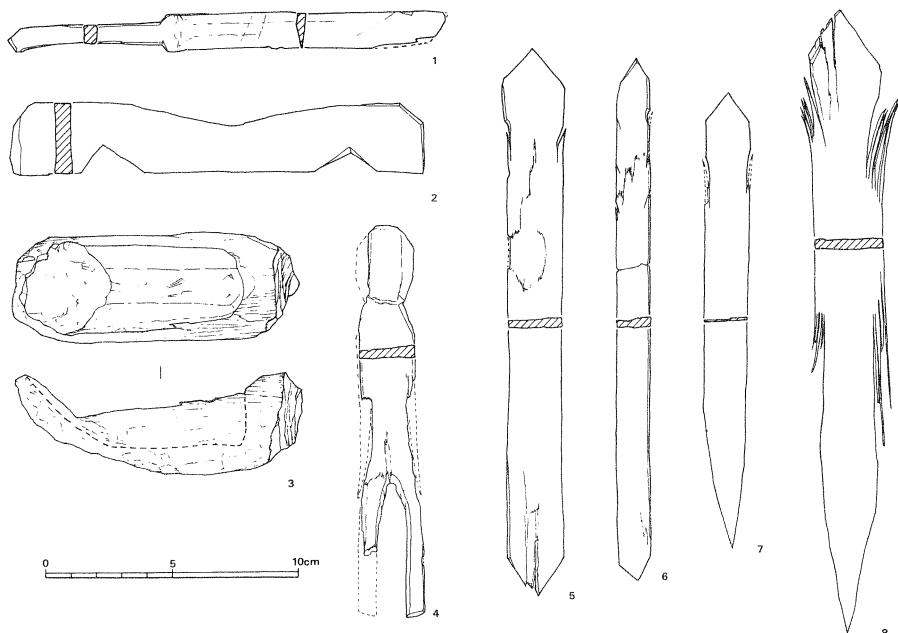
S D1901-A上層の整地土や土壙S K2028, 2081, 2094などから出土した瓦には、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦の他、熨斗瓦、面戸瓦があり、丸・平瓦では粘土紐巻き上げ作りの痕跡をとどめるものが多い。軒丸瓦では、出土量の約7割を6273型式が占め、その中では、6273 A型式が最も多い。軒平瓦では、約8割を6641型式が占め、そのうち、6641 E型式が特に多い。このことから、軒丸瓦6273 Aと軒平瓦6641 Eが大極殿院所用瓦の組合せの一つと考えられる。この結果は、かつての古文化研究所の調査成果とも一致する。他に注目すべき出土品として、S D1901-A上層より出土した墨書瓦片がある。丸瓦の凸面に「^(前)玉評」「大里評」と記したもので、前者を「前玉評」とすれば、いずれも武藏国

の評名である。

木器は、いずれも大溝S D1901-Aより出土したものである。曲物容器、匙、糸巻き、横櫛、物差、下駄、砧、鋤、刀子形（1）、馬形（2）、舟形（3）、人形（4）、斎串（5～8）などがあり、食膳具から紡織具、農耕具、祭祀具の各種にわたっている。中でも斎串は各種の形態のものを含んでおり、注



大極殿院の軒瓦組合せ（1/6）



SD 1901-A 下層出土木器 (1 / 3)

目される。また、この他に、墨で人物を描いた木札（表紙カット）が1点出土した。なお、以上の木器とともに、SD 1901-A 下層からは、建物部材の一部とみられるものや、手斧の削り屑などの、造営に関する多量の木片が出土している。

また、SD 1901-A 下層を中心に、多量の獣骨が出土した。馬骨と犬骨とみられるものが主であり、いずれも頭骸骨、下顎骨、および四肢骨を含んでいる。現状で、馬骨9個体分以上、犬骨5個体分以上が認められるが、この獣骨類の内容や性格についてはさらに検討を加えることにしたい。

以上の主要遺物の他に、金属器として、SD 1901-A 下層から矢柄插入式の銅鏃1点、SD 2065から漆塗の銅製責金具1点が出土しており、また石製品として、SD 1901-A 下層から滑石製勾玉1点、床土層から碧玉製鉤の破片1点が出土した。